徳川園の歴史的考察

(1) 園内の遺構とその起源について

宮　崎　幸　恵

The historical consideration of Tokugawa-en

part 1: The remains of Marquis Tokugawa Yoshiakira's residence in the garden

Sachie Miyazaki

1. はじめに

「徳川園」は，昭和6年に尾張徳川家より名古屋市に寄付されて以来，市民に親しまれ活用されている。最近では徳川園ならびに徳川美術館のある領域も含め，この地域全体の活性化をはかるため，園内施設の見直しもなされつつあり，歴史的文化ゾーンとして新たな試みがなされようとしている。

寄付当時には，明治33年に完成した尾張徳川家名古屋大曽根邸の正門，大玄関，書院をはじめとする客室部分および住居部分などが存在したが，これらの建物の大部分は第二次世界大戦時の戦災等でほとんど焼失した。その結果，園内およびその周辺に残された歴史的遺構は数少ない。

これらの遺構は，この地を中心として中断はあるものの約250年にわたって尾張徳川家が大曽根邸として住居を構えた歴史に由来するものである。そのため本研究においては尾張徳川家名古屋大曽根邸を中心とした歴史を述べ，現存する遺構がどの時代にさかのぼり，またどのように利用されていたかを考察する。

2. 調査方法

名古屋市蓬左文庫，財団法人徳川黎明会，徳川林政史研究所および徳川美術館の協力を得て，尾張徳川家名古屋大曽根邸に関する史資料等を参考に調査した。また遺構の一つである蓬左文庫旧書庫については1991年6月に名城大学理工学部建築学科歴史意匠学研究室の協力を得て，実測調査を行なった。

3．尾張徳川家名古屋大曽根邸の起源

明治33年に完成した尾張徳川家名古屋大曽根邸は，名古屋城の東方，旧城下町の東端部にあり，現在名古屋市蓬左文庫などのある徳川園およびこれに隣接する徳川美術館などのある地域を中心として造営されていた。この起源は，尾張２代藩主徳川光友の隠居所にさかのぼる。これは，元禄７年（1694）７月家老成瀬隼人正，石河大和守，渡邊半蔵の下屋敷を上地させて，奥向を作事奉行堀田半七，表向を同横井小太夫に，また御下屋敷奉行を加藤弥五八，野呂瀬増左衛門，浅井市太夫の３名に命じ，野崎源五右衛門を総奉行として造営したもので，光友がここに移居したのはその翌８年（1695）３月18日であった。[1)]

名古屋城下図〈元禄年間（1688－1703），図１〉[2)] によれば，建中寺北東部に大納言様御下屋敷と記された箇所があり，ここが隠居所に相当する。この区域は南は建中寺堀端，西は同寺西堀通り，東は出来町を境として，その広さは東359間半（約647メートル），西325間（約585メートル），南526間（約947メートル），北378間（約680メートル）を有し，その総面積は132,097坪（約435,920平方メートル）という広大なものであった。[1)]

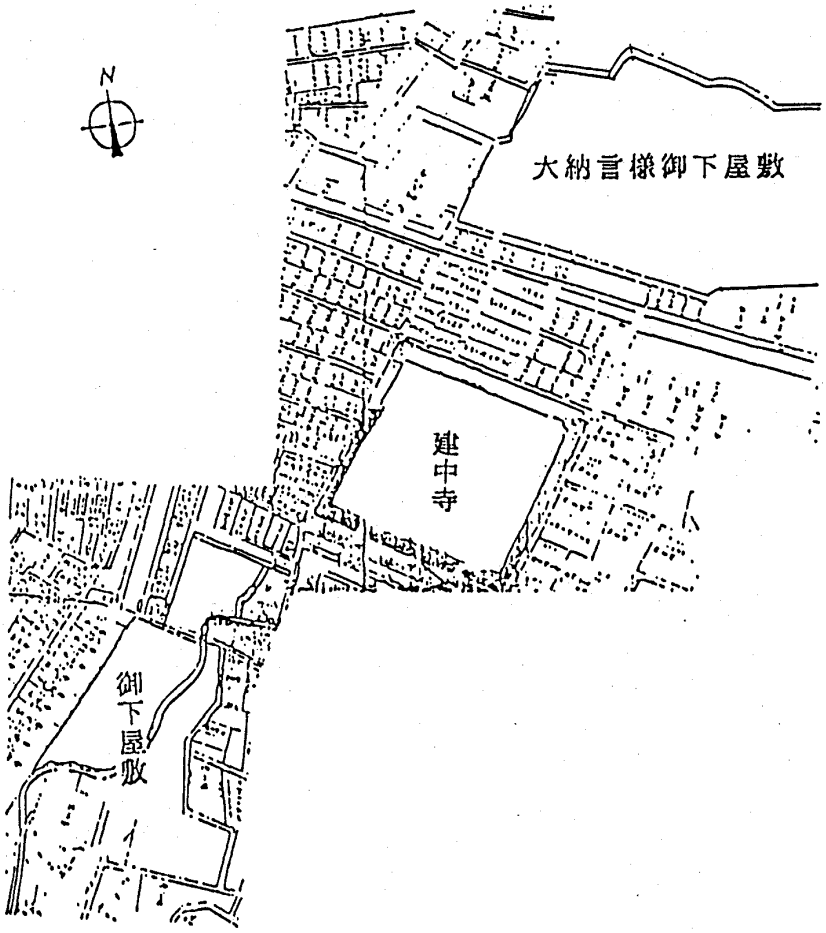


図１　名古屋城下図
〈元禄年間（1688－1703）〉

なお，この地図には建中寺南西部に御下屋敷と記された箇所があり，ここが尾張徳川家の従来からの御下屋敷[注1]に相当する。

隠居所の様子を表した絵図等は残念ながら発見されていないが，趣向をこらした庭園が存在したに違いない。光友の作庭は著名であり，彼による江戸市ケ谷本邸，戸山荘などの庭園の様子が明確にされている。[3] 邸内の泉水は，末森村猫が洞の池水を引き，ここに16挺立ての舟を浮かべたことが記されている。[1]

4．尾張徳川家名古屋大曽根邸の変遷

元禄13年（1700）に光友が亡くなると，広大な隠居所は御殿（旧成瀬屋敷）を残し庭園部分を分割して再び成瀬，石河，渡邊三家老の下屋敷となり，屋敷地は約50,000坪となった。この御殿部分も享保５年（1720）には成瀬家に返還され，この地の尾張徳川家の敷地はなくなった。

明治維新後，成瀬および石河家より再び上地させ尾張徳川家の別邸敷地となったが，大規模な建築は存在しなかった。[4]

明治21年に旧渡邊家敷地を購入し，翌年から事務所等の移築や新築による屋敷の整備が始まった。移築された建物の多くは，名古屋城北部の尾張徳川家奥山町邸[注2]内にあったものである。この奥山町邸は明治５年に整備された新しい邸宅であったが，明治23年陸軍省の用地となったためこの別邸敷地へ移築されることになったのである。

明治26年に，当主の義禮（よしあきら）[注3]夫妻も東京より移住し，この大曽根の屋敷が本邸となった。当時の建築構成は主として住居部分のみであったので，名古屋に本邸を構えるにあたって客室を設ける必要があった。そこで当時洋風の建築様式を巧みに取り入れていた久留正道に設計を依頼し，江戸期に建てられた徳川家市ケ谷邸の建物図を参考にして，また新しい時代にふさわしい様式の建築を求めて明治33年に尾張徳川家名古屋大曽根邸は完成した。[5] この明治33年に完成した尾張徳川家名古屋大曽根邸については徳川園の歴史的考察(2)で詳述する。

明治34年には，大曽根邸内に教育博物館[注4]が移築され，この頃には研究的な要素をもった植物園も造営されていた。[6]

大曽根邸の当主義禮が亡くなった明治41年には夫人が東京に移住したため，留守邸となった。豪華であった邸宅は，日常的にはわずか８年間使用されただけであった。

大正８年に教育博物館を愛知県に寄付し，また屋敷地約8,000坪を鉄道省に売却し，この翌年に尾張徳川家の本籍は東京へ移籍された。

大正10年および12年には建物の一部を覚王山日暹寺（現日泰寺），戴恩会および長栄寺[注5]に寄付した。

昭和６年には屋敷内土地約8,700坪および建物約540坪を名古屋市へ，また美術館用地として約3,000坪を財団法人徳川黎明会へ寄付した。これらの寄付により尾張徳川家名古屋大曽根邸

の敷地は現在の名古屋市蓬左文庫，東図書館，ボタン園のある部分のみとなった。

寄付を受けた名古屋市は種々の施設を加えて「徳川園」と称し，翌７年の明治節に有料で公開した。一方徳川黎明会は，昭和10年に徳川家に伝わる美術品等を保存および展示するために財団運営による徳川美術館を開館した。

昭和10年には旧大曽根邸内の１号および２号土蔵を小規模となった大曽根邸内に移築し，１棟として改修した。これが現蓬左文庫旧書庫である。

第二次世界大戦により，徳川園内および大曽根邸内の建物の多くを焼失した。

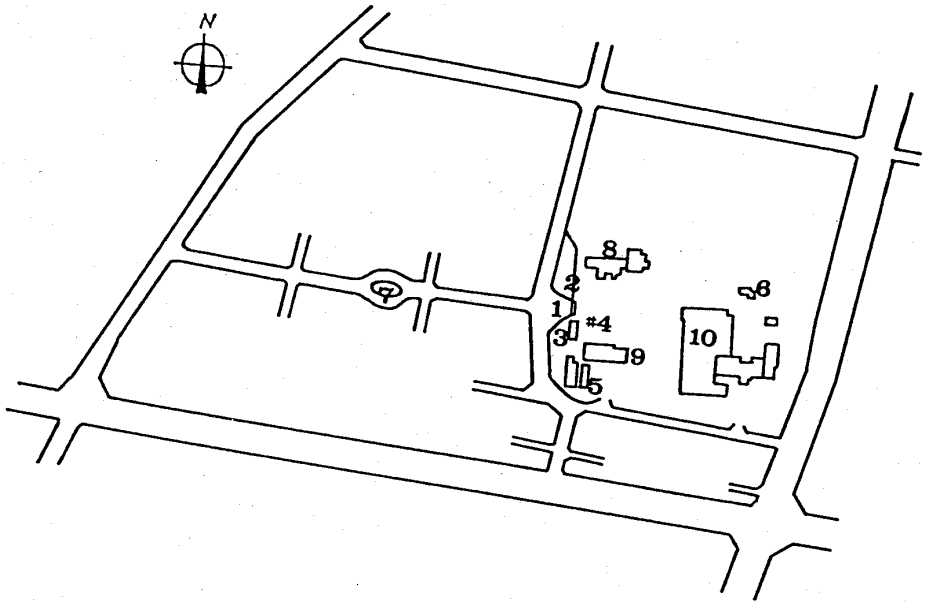
昭和25年に蓬左文庫蔵書，文庫用建物，蓬左文庫旧書庫等を2,200万円で名古屋市へ売却するとともに大曽根邸敷地約2,000坪を名古屋市へ寄付し，それらは徳川園の一部となった。[7] この寄付により尾張徳川家名古屋大曽根邸の敷地は皆無となった。

５．徳川園内および周辺の歴史的遺構

昭和６年に名古屋市に寄付され，昭和７年に市民に一般公開された「徳川園」は，旧尾張徳川家の正門を入口に構え，わが国の伝統文化の殿堂にふさわしい環境のもとに住宅部分も含めて整備されていった。うっ蒼と茂る樹林地は市中稀にみる自然林をなしていた。[8] 昭和12年築港で開催された名古屋汎太平洋平和博覧会の迎賓館（蘇山荘）がこの園内に移築された。

第二次世界大戦時に空襲を受け，正門，門脇長屋，旧３，８，９号土蔵，名古屋市蓬左文庫旧書庫，土塀および蘇山荘を残し，ほとんどの建物は焼失した。戦後は約2600坪を拡張し，昭和29年「葵公園」と改称して都市公園として再発足し，平成元年再び「徳川園」と改称した。[8]

「徳川園」内およびその周辺に存在する尾張徳川家名古屋大曽根邸の遺構には現在，正門，



1：正門
2：土塀
3：門脇長屋
4：井戸
5：蓬在文庫
　旧書庫
6：山の茶屋
7：やぶつばき跡
　および井戸
8：徳川園会館
9：東図書館
10：徳川美術館

図２　遺構（１～７）配置図

土塀，正門脇の長屋，井戸，名古屋市蓬左文庫旧書庫，山の茶屋，やぶつばき跡付近の井戸がある。図２にそれらの位置を示した。

(1) 正門，土塀，正門脇の長屋および井戸

正門（写真１）は正面の柱間が３間で中央の１間を通路とし，本瓦葺の切妻屋根が架けられている。これは，鎌倉末期あるいは室町初期の武家や公家の屋敷などに現われた門形式の一つで三間薬医門である。現在「徳川園」の正門として，また旧尾張徳川家の歴史を呼び起こさせる記念建造物として機能している。本邸が完成した時期（明治33年）に整備された門と伝えられ，格調の高い当時の姿をそのまま残している。この正門については実測調査等を行なう計画が現在進められている。

本邸完成時には，この正門の手前約250ｍの位置に表御門があった[9]が現在のところその痕跡も不明である。

正門に向かって左側には土塀（写真２）が一部残っている。邸宅の住宅のまわりを囲っていたと考えられ，旧武家の豪邸を呼び起こす雰囲気を持っている。しかしながらこの土塀は部分的に損傷もみられ，内側より補強されているものの，十分な保存整備が必要である。

正門の右側には，本造平家建て・入母屋造り・桟瓦葺きの門脇の長屋（写真３）が遺構として残り，現在は東土木事務所の徳川園分所として使用されている。

この正門を入った右側には井戸（写真４）が残っている。徳川邸建物平面図[10]にもこの井戸は記されており，本邸完成時より日常的に女中や使用人が家事仕事等に使用していたと考えられる。正門と異なり現在の徳川園内では何ら説明がなされていないが由緒あるものである。

(2) 蓬左文庫旧書庫

尾張徳川家名古屋大曽根邸敷地の西北部にあった１号及び２号土蔵２棟を昭和10年（1935）に移築し，合わせて１棟とした。この時に外壁と屋根面を鉄筋コンクリートで補強し，基礎を鉄筋コンクリート造とした収蔵庫が，現在名古屋市蓬左文庫の仮書庫（倉庫）として利用されている（写真５）。この建築物は古い建物の外壁をコンクリートで被覆し，建物を再利用するという昭和期の建築技術の水準を知る上でも貴重なものである。[11] 移築改修の設計は吉本与志雄[注6]建築事務所が行ない，その図面や当時の仕様書も現存している。仕様書[12]には，鉄筋コンクリート工事・石工事・木工事・金物工事・屋根工事・左官工事・雑工事・付帯工事等細かに記載されている。実測調査を行なった結果，前述した仕様書に記載されている通りの工法が採用されており，現存する図面[13][14]や記録類[15]の通り施工されていることを確認した。すなわち，それぞれ72.56坪の床面積を持つ２棟の土蔵を移築して１棟の収蔵庫に建て替える際，余分となった隅合掌を除去したため在来の土蔵２棟を合計した面積より17.64坪減少し，桁行も小さくなった。また出入口２カ所には金庫扉を取り付け，外壁を鉄筋コンクリートで補強し，基礎

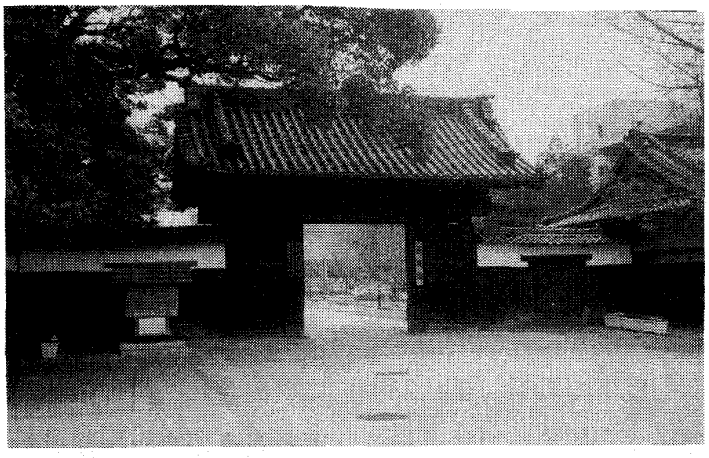


写真 1

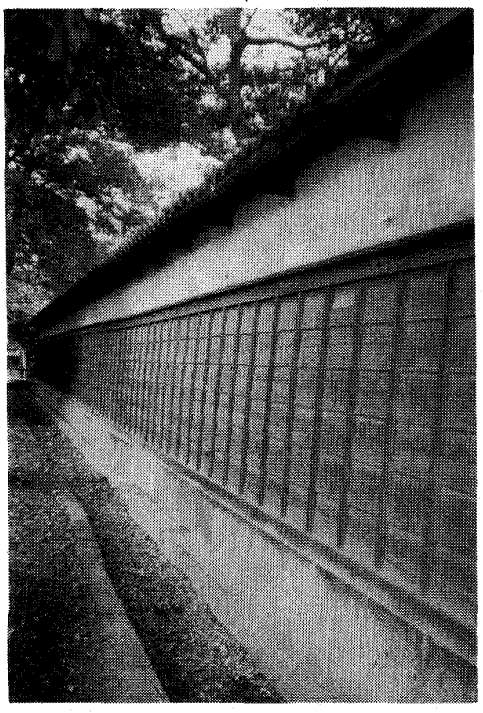


写真 2

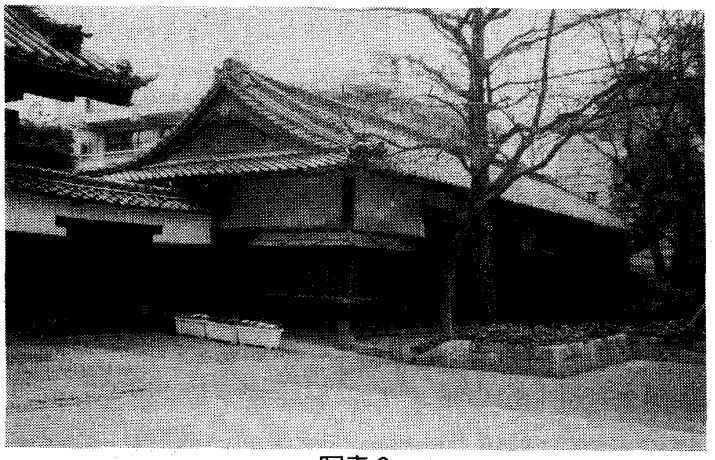


写真 3

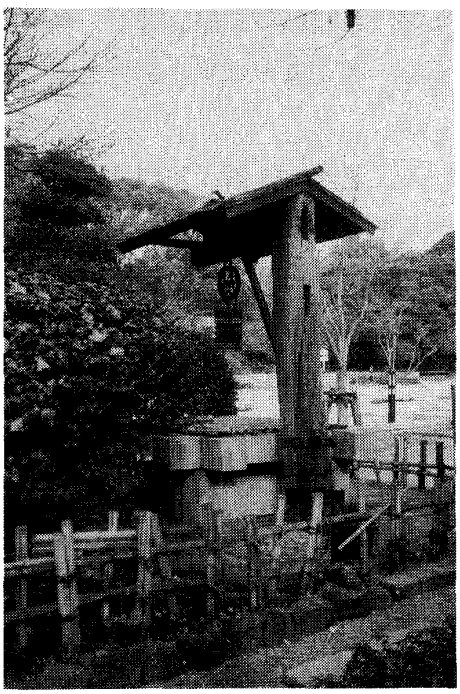


写真 4

写真 5

を鉄筋コンクリート造としたことを除いては，在来の木造軸組や小屋組を使用していることを確認した。[11] 内部は完成した当時の土蔵の様子をよく伝えており，洋風建築が導入された時期に造られた数少ない洋式小屋組の土蔵であり，良質の檜材を用いた質の高い土蔵である。また使用されている部材断面は大きく，損傷や歪みなどは少なく，鉄筋コンクリートで補強した外壁や基礎の部分についても亀裂などは見られず，保存状態もよいことが判明した。[11] 1号土蔵と2号土蔵とは桁行，梁間は等しいものの，桁行方向の中柱の配置間隔（3間，2間，3間の計8間の土蔵と，2間，2間，2間，2間の計8間の土蔵）が異なること，また隅合掌部分の火打ち梁の大きさが異なることが判明した。さらに2つの土蔵を1つにまとめるにあたり，不足する部材（陸梁1本）を不要となった隅合掌の部材から転用し，接合部に金物を用いて補強していることも判明した。移築に際し窓をすべて塞いでいるので，もとの窓の位置を確認するため内壁の羽目板を可能な限りはずしたが確認できなかった。階段の位置については移築以前の位置関係と同じとは考えにくいため，推測される部分の部材について痕跡が見られるか否かで判定しようと試みた。しかし痕跡は見つからず，現時点では断定できない。

徳川邸建物平面図[10]には土蔵が13棟あり，完成当時よりさらに土蔵が新築されたと考えられるが，それら個々の土蔵の建設年代については記録されておらず不明である。一般的には土蔵が造られた順に番号をつけるため，名古屋市蓬左文庫旧書庫となった1号および2号土蔵は明治23年に造られた[5]とされている。それゆえ，この土蔵の設計者は大曽根邸の設計者であった久留正道ではないと考えられる。

この土蔵の設計者の候補として尾張徳川家の作事方棟梁であった第5代鈴木幸右衛門（1844～1911）が考えられる。彼は代々名古屋で大工棟梁を営んできた家柄であり，近世以来の伝統的和風木造建築の技術を修めた大工棟梁のひとりであった。明治初年から明治30年代にかけては，名古屋市・愛知県・三重県の役所や学校，病院など官庁工事を多く手がけている。[16] 彼の作品リストの中に徳川邸御本間（明治27年1月，設計施工），徳川邸第1宝蔵（同28年9月，施工），徳川邸第2宝蔵（同29年3月，施工）がある。名称や建築年代は異なるものの第1宝蔵＝1号土蔵，第2宝蔵＝2号土蔵の可能性は十分考えられる。また，1号および2号土蔵が明治28年，29年に建築されたものと考えた場合には，久留正道による設計の可能性もある。第5代鈴木幸右衛門の作品リストには，設計・設計施工・施工・修理設計等の区別が明確に記載されており，それによれば宝蔵は施工のみである。このように，1号および2号土蔵の建築年代や設計者は現在のところ正確には判定できない。しかし洋式小屋組のキングポストトラスを用いた土蔵は例も少なく，これら土蔵の設計者はかなり当時の建築の動向に敏感かつ木造和風建築にも精通した人であったに違いない。

(3) 山の茶屋

この茶屋は，徳川邸建物平面図[10]に記されているので本邸完成当時から存在した茶屋と考え

られ，位置も変わっていない（写真６）。

江戸にあった下屋敷から移築された建物らしいが詳細は不詳である。

山下・三井によりこの山の茶屋の実測調査等が1963年になされている。[17] それによれば，木造平家建て・寄棟造り・桟瓦葺・土廂つきで東西に棟をもつ建物と南北に棟をもつ建物が柱１本を共有して直角につながっている。内部の壁面はすべて土壁である。各部屋のレベルは，上段の間，中段の間，下段の間との名称が示す通り３段階になっている。

平面計画からみると茶席のための建物というより，むしろ大名の遊興用の建物として林泉回遊式大庭園の中に造った休憩所，茶屋などの宴遊用の建物と考えられる。大曽根邸の住宅内にも茶席が設けられていた。当主義禮が茶の湯を好んだかどうかは不明であるが，多くの関心をもっていたと推察される。

廂，雨戸および廊下部分が一部改修されたが他は当時の姿をそのまま伝えている。現在は財団法人徳川黎明会により丁寧に維持管理されており，年２回（春，秋）の茶席に使用されている。

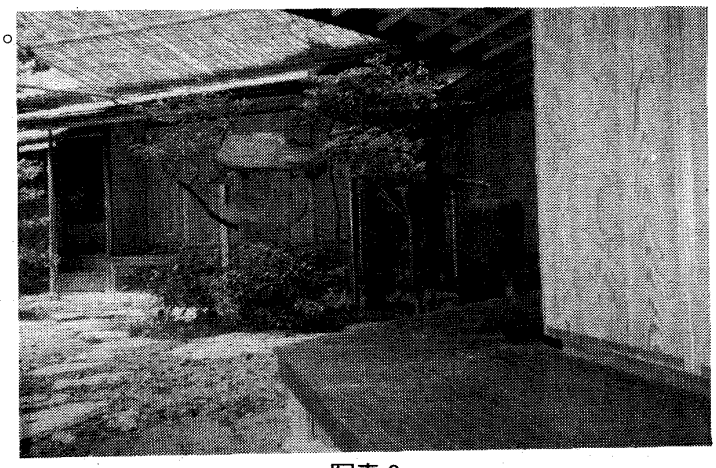


写真６

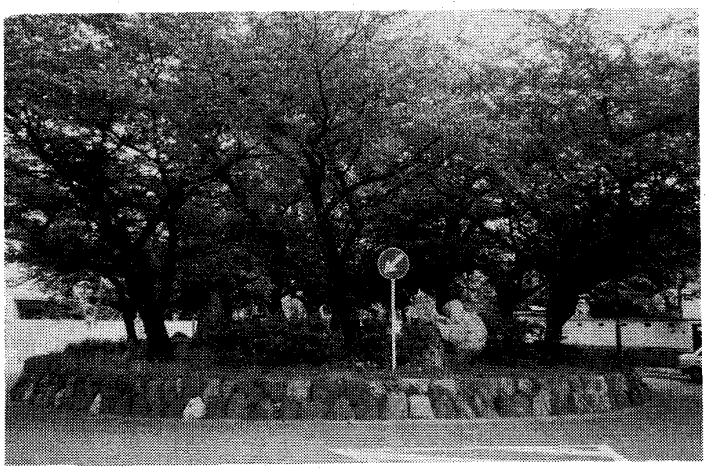


写真７

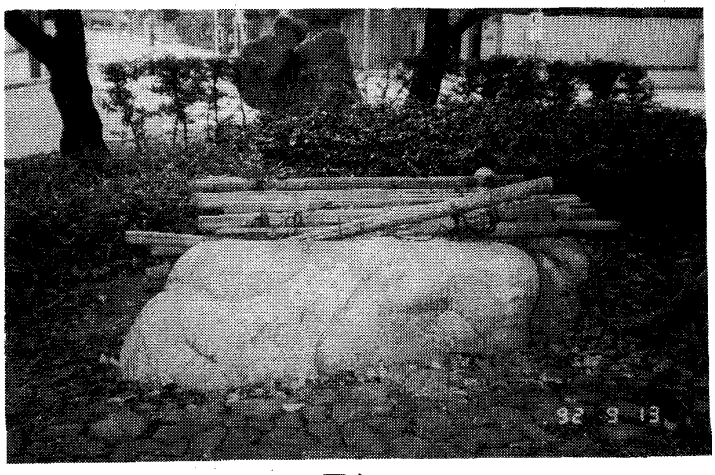


写真８

(4) やぶつばき跡と井戸

徳川園の正門に向かう道路が正門の手前約120ｍのところでロータリーとなっている（写真７）。この部分に２代藩主徳川光友お手植えのやぶつばきの大樹が戦前まで存在していた。この土地は昭和６年に名古屋市に寄付されたものである。ここには現在では本邸完成以前の明治３年頃より存在したと考えられる井戸（写真８）が残っており，[4] 多くの椿や桜が植えられている。

6．大曽根邸およびそれに関連する略年譜

元　禄	8年以前	成瀬・石河・渡邊家の下屋敷であった。
元　禄	8年（1695）	光友の隠居所となる。当時の御屋敷の敷地は132,097坪であった。
同	13年（1700）	光友没後，御殿（旧成瀬屋敷）のみ残して庭園部分を分割し，再び成瀬・石河・渡邊家下屋敷となる。御屋敷の敷地は約50,000坪となった。
享　保	5年（1720）	御殿を成瀬家に返還する。
明　治	元年（1868）	成瀬・石河家より再び上地，尾張徳川家別邸となる。
同	21年（1888）	旧渡邊家敷地を購入し，拡張する。
同	22年（1889）	元授産所織工場（277坪28）を移築する。
同	23年（1890）	奥山町邸より事務所・屋敷・土蔵などを移築，新築する。
同	24年（1891）	2階建1棟（80坪65）を新築する。
同	25年（1892）	登代子夫人，東京より移住する。
同	26年（1893）	義禮・良子夫妻，東京より移住して本邸となる。
同	27年（1894）	御居間，廐，事務所，女中部屋（計240坪5,488）新築落成する。 東京横網町邸[注7]より3階小座敷移築する。
同	28年（1895）	家職長屋1棟を購入する。御居間1棟（86坪902），家職長屋3棟（82坪368）新築落成する。 尾張徳川家名古屋大曽根邸新築基礎工事着工する。
同	29年（1896）	家職長屋1棟（44坪5）新築する。
同	30年（1897）	家職長屋1棟（29坪975）新築する。
同	31年（1898）	御居間1棟（22坪11），廐1棟（73坪598），練武場1棟（97坪424）新築落成する。練武場は後に明倫中学校の附属となる。
同	32年（1899）	寶蔵木造2階建1棟（21坪22）を名古屋大須万松寺より移築する。 土蔵2棟（78坪8），家職長屋1棟（51坪36）新築落成する。
同	32年（1899）	尾張徳川家名古屋大曽根邸（主屋）棟上げ式を挙行する。
同	32～33年 （1899～1900）	土蔵3棟新築する。
同	33年（1900）	名古屋大曽根邸落成する。
同	34年（1901）	愛知博物館より寄付を受け，教育博物館移築増設。 建物は，陳列館1棟（木造瓦葺2階建，166坪83），研究館1棟（木造瓦葺2階建，110坪），門番所及び便所2棟（木造瓦葺平家，5

		坪58)，門番所（16坪92)，農園小屋（15坪25）であった。
同	36年（1903）	御広座敷１棟（８坪75）増築する。
同	41年（1908）	義禮氏没後，良子夫人東京へ移住し，留守邸となる。
大　正	８年（1919）	博物館及び明倫中学校を愛知県に寄付する。大曽根町，新出来町内の敷地8,159坪53を鉄道省に売却する。
同	９年（1920）	尾張徳川家本籍，東京へ移籍する。
同	10年（1921）	宝蔵１棟（21坪22)，覚王山日暹寺（現日泰寺）へ寄付する。 不用建物元御居間１棟及び付属家を戴恩会へ寄付する。これが尾陽神社社務所[注8]となる。
同	12年（1923）	神殿及び付属建物（27坪08）を長栄寺へ寄付する。
昭　和	６年（1931）	敷地内土地8,716坪88，建物538坪85を名古屋市へ寄付する（徳川園が誕生する)。 美術館敷地として，2,983坪を財団法人徳川黎明会へ寄付する。
同	10年（1935）	４～７号土蔵取り壊し，跡地に１，２号土蔵を移築し，現蓬左文庫旧書庫落成する。
同	14年（1939）	約190坪を名古屋市へ寄付する。
同	20年（1945）	戦災により，正門，３・８・９号土蔵，旧書庫，２階建物置を残して敷地内の建物焼失する。
同	25年（1950）	蓬左文庫蔵書64,000点，文庫用建物棟（３・８・９号土蔵，旧書庫，２階建物置及び平家２棟）を2,200万円で名古屋市へ売却するとともに文庫用敷地として大曽根邸敷地のうち土地2,000坪67を名古屋市へ寄付する。
同	26年（1951）	名古屋市蓬左文庫開館する。
同	40年（1965）	旧書庫，８号土蔵，２階建物置，土木事務所を残し，３・９号土蔵はじめ，残っていた建物を取り壊す。
同	41年（1966）	東図書館落成，開館する。
同	56年（1981）	土地区画整理法により，蓬左文庫用敷地は農政緑地局の管理下におかれる。 ８号土蔵，２階建物置を取り壊し，蓬左文庫改築工事に着手する。
同	57年（1982）	蓬左文庫改築工事落成する。
同	58年（1983）	新館で蓬左文庫の業務を開始する。

注１：御下屋敷（おしたやしき）

延寶７年（1679）藩主光友が築いたもので，東区葵町（現在東区代官町から葵に至る地

域）にあった。面積は約64,000坪で，豪壮な邸宅および北庭と南庭があり，京都の名所や東海道を模した趣向を凝らした庭であった。また屋敷内には薬種屋，酒店，瀬戸物屋等の店屋，菜園，観音堂，稲荷堂などが点在し，公務を離れた藩主の休息所となっていた。また，４代藩主吉通の生母「本寿院」が江戸で乱行の末，この御下屋敷に送られて晩年を過ごした。将軍吉宗の勘気にふれて蟄居させられた７代藩主宗春も，この御下屋敷で余生を送った。[18)]

注２：奥山町邸

下深井御庭の城北奥山町にあった徳川邸を指す。昭和10年発行の地図によれば，名古屋城北部に奥山町と記された箇所があり，その付近に徳川邸も記されている。

明治５年５月20日に城内新御殿より事務所を城北の奥山町に移転し整備をした。建物の総坪数は，435坪75であった。敷地坪数については未詳。明治23年１月陸軍省の用地となり家屋を取り壊し，大曽根に移転した。

注３：義禮（よしあきら）

讃岐高松藩知事従２位伯爵であった松平頼聰の次男として文久３年（1863）９月に生まれる。書を能くし，明治９年５月徳川慶勝の養子となる。同13年に家督を継ぎ，同17年７月に侯爵の位を受ける。同年９月に英国に私費留学し，同20年に帰国する。渡航目的は，人文系とされているが不明である。同23年貴族議員となり政界で活動する。枢密顧問官も務める。同41年腎臓炎を患い，同年５月脳溢血を併発して死去する。勲３等瑞寶章を授かる。夫人は登代子（慶勝の４女）と良子（かたこ，慶勝の７女）。[19)20)21)]

注４：教育博物館

明治初期，博物学の研究家が集まって浪越博物学会を創設し，医学校の解剖学教授奈良坂源一郎氏が会長となり，明治24年（1891）名古屋市中区門前町七ツ寺西に建設されたものである。陳列館は２階建で，動植鉱物の標本が整然と陳列されていた。明治34年に明倫中学校付属博物館として大曽根の徳川邸内に移築された。[22)]

注５：長栄寺

名古屋市北区柳原２－17

注６：吉本与志雄

蔵前工業会館〈東京，昭和８年〉，旧徳川美術館〈名古屋，昭和９年〉などを設計した。

注７：横網町邸

東京横網町１丁目19番地に存在した。明治11年９月邸宅上棟式を挙行し，完成した。ここに義禮夫妻が居住していたが，彼らは明治26年に名古屋へ移住した。同28年の時点で敷地総坪数4,115坪55，建物総坪数864坪58であった。

注８：尾陽神社

名古屋市昭和区御器所町１－２

7．謝　　辞

本論文をまとめるにあたり，名城大学理工学部建築学科伊藤三千雄教授に指導を頂いた。深く感謝致します。また，史資料の提供ならびにご協力を頂いた名古屋市蓬左文庫，徳川黎明会，徳川林政史研究所，徳川美術館の方々に深く感謝致します。

参考文献

1）斎藤俊之助編，名古屋郷土叢書第三巻（東大曽根町誌），東大曽根町誌刊行会，1941
2）名古屋城下図〈元禄年間，143.5cm×134.0cm〉，名古屋市鶴舞中央図書館蔵
3）小寺武久，尾張藩江戸下屋敷の謎，中公新書，1988
4）宮崎幸恵，尾張徳川家名古屋大曽根邸 (2)建築構成の変遷について（明治33年以前），日本建築学会東海支部研究報告集，1993
5）歴史的建造物研究会，名古屋市蓬左文庫旧書庫調査報告書，名古屋市蓬左文庫蔵，1993
6）宮崎幸恵，尾張徳川家名古屋大曽根邸 (3)庭園構成について，日本建築学会大会学術講演梗概集，1993
7）名古屋市会事務局編，名古屋市会史第11巻，名古屋市会事務局，1958
8）東区史編纂委員会編，東区史，東区総合庁舎建設後授会，1973
9）大曽根徳川邸西部農園之図〈78.3cm×55.4cm〉，名古屋市蓬左文庫蔵
10）徳川邸建物平面図〈124cm×102cm〉，財団法人徳川黎明会蔵
11）宮崎幸恵，名古屋市蓬左文庫旧書庫，日本建築学会東海支部研究報告集，1992
12）尾張徳川家名古屋御別邸倉庫移築工事仕様書，名古屋市蓬左文庫蔵，1935
13）名古屋徳川別邸倉庫移築詳細図，名古屋市蓬左文庫蔵，1935
14）蓬左文庫平面図，名古屋市蓬左文庫蔵，1950
15）名古屋市蓬左文庫旧書庫調査報告，名古屋市蓬左文庫蔵，1982
16）伊藤三千雄・水野信太郎，大工棟梁　鈴木幸右衛門について，名城大学理工学部研究報告第22号，1982
17）山下武彦・三井富雄，山の茶屋実測調査，名古屋工業大学卒業論文，1963
18）名古屋市役所編，名古屋市史－地理編，名古屋市役所，1916
19）日本史籍協会編，現代華族譜要・続日本史籍協会叢書，東京大学出版会，1976
20）大植四郎，明治過去帳〈物故人名辞典〉，東京美術，1971
21）手塚晃，国立教育会館編，幕末明治海外渡航者総覧　第二巻人物情報編，柏書房，1992
22）愛知県文化財保存振興会編，郷土資料　愛知の史跡と文化財，泰文堂，1962